

『のだめカンタービレ』

二ノ宮知子 著
講談社 2002年

子供の頃に読んでいた作品を再び読み返してみると、当時は分からなかった主人公の気持ちが読み取れるようになっていたり、考えさせられる部分が増えていたりする。『のだめカンタービレ』もその一つであり、定期的に読み返したくなる作品だ。

『London ダウト・ボーイズ』でデビューした埼玉県出身の漫画家、二ノ宮知子氏がクラシック音楽を題材に描いた少女漫画である『のだめカンタービレ』。この作品で第28回講談社漫画賞を受賞し、テレビドラマ、アニメ、映画など数多くのメディア化もされている。

あまり馴染みのないクラシック音楽を扱った作品ながら、わかりやすく読みやすい。それでいて、努力だけでは報われない音楽の世界の厳しさというもの、しっかりと描かれている。他人の才能に対する嫉妬、何度練習しても思うようにできない焦りや怒り、いつまでこんな日々を続ければいいのかという葛藤、そして素晴らしい演奏ができたことへの充実感と、その裏にある、もうこれ以上の演奏はできないのではないかという不安や恐怖…。これらの感情は、音楽の世界を全く知らない者にも突き刺さる。

その一方でコメディ要素も強く、個性豊かな登場人物たちのやり取りが、重々しさを和らげ読者に笑いを与えてくれる。

特に心に残るのは「楽譜を目の前にした時、いつも高い壁を感じている。でもひとつひとつ自分で乗り越えていくしかないから。」という言葉と「何百年も前に記された音符が、生まれ育った国も性別も目の色もなにもかも違うふたりに同じ音を思い描かせる。わかり合えないと思っていた人とたった一音でわかり合えたり、惹かれ合ったり。今も昔も変わらない。」という言葉。前者からは、音楽に向き合うことの恐怖感や孤独感が見て取れ、後者からは音楽が人と人とを繋げる力、人生をも変えてしまう力を持っていると言うことが読み取れる。真逆のように感じる言葉だが、それこそが音楽の魅力であり、厳しい世界たる所以だと私は考える。

現在、誰もが気軽に音楽を発信、入手できるようになったことで、音楽の価値が落ちたと言う者がいるかもしれない。しかしこのインターネット社会は、私たちが様々な音楽に触れ、その魅力を感じることのできる機会を与えてくれたと考えることもできる。今の社会だからこそ、『のだめカンタービレ』を通じて、クラシック音楽に触れてみるのも良いのではないだろうか。

(吉田 海 心理学科4年次生)

本の扉

『図書の修理とらの巻』

書物の歴史と保存修復に関する研究会 編
澤標 2017年

図書館で働いていると、たくさんの人の手に取られ閲覧を繰り返されるうちに傷んでしまった本と出会うことがあります。普段、本を手にとるとき、その扱い方について意識している人はどれくらいいるのでしょうか。本は普段、様々な状況に置かれています。例えば、飲み物や食べ物による被害を受けてしまったり、雨などで濡れてしまったり、書棚から取り出される際の取り出し方、本の並べ方や開き方などによっても、破れや割れ、歪みが生じるような力がかかってしまうこともあります。

本書では、このように傷んでしまった本に対して手当てを施す「図書の修理」について、主に図書館の本を中心にその実例が紹介されています。「準備編」では「製本の基礎」、「本の構造」から「修理の心得」まで、修理作業を行う前に押さえておきたい最低限の知識や考え方が説明されています。「実践編」では、実際に図書館の図書によく見られる破損例を取り上げ、小規模修理の実例が紹介されています。修

理過程で注意したい細かなポイントとともに、イラストを用いた説明がとてもわかりやすく示されています。

内容は図書の修理に特化したものですが、実際の修理作業に関わる機会がないという人でも、本書を通して、物理的な視点から「本」というものを捉えてみることで、これまでの見方とは少し違う「本」との向き合い方を発見できるかもしれません。本が好きな人はもちろん、普段、少しでも本を手にする機会があるという人に、一度手に取ってみてほしい1冊でもあります。

私自身は、図書館業務の中で実際に図書の修理に携わることがあります。図書館の本といっても、その形態や使用されている素材、綴じ方など、それぞれの本が持つ特徴は、時代や場所などの出版背景によって様々で、それぞれに生じる傷みの状況も異なります。たくさんの修理方法の中からより適切なものを選択し処置を施すことで、少しでも長くその本の寿命を延ばし、少しでも多くの人々が修理を終えたその本と出会うことができるよう、日々悩みながらではありますが、図書の修理に取り組んでいきたいと思っています。

(高木 孝菜 図書館情報センター図書館司書)

書庫から
書架から